ハリウッドのホラー映画はこうして始まった

曽根田　憲　三

善と悪の終りなき戦いをテーマにしたホラー小説は優れた劇になった。そのため、ゴシック小説が出版されるや次々と多くの作品が演劇に変えられていく。ホラーものの中でも最も評価が高い作品の一つと見なされている、メアリー・シェリー（Mary Wollstonecraft Godwin Shelley, 1797– 1851）の 19 世紀初頭の小説『フランケンシュタイン』（*Frankenstein; Or, The Modern Prometheus*, 1818）が、したがって、劇に脚色されたのも何ら不思議ではない。とはいえ、当時の観客が演劇の中に求めたものは哲学やこうるさい説教ではなく、今日の私たちと同様、ステージの上で繰り広げられるアクションやメロドラマだった。そのため、アイルランドの劇作家兼舞台俳優、ハミルトン・ディーン（Hamilton Deane, 1880-1958）の依頼で、イギリスの劇作家であり小説家でもあるペギー・ウェブリング（Peggy Webling, 1871–1949）が脚色し、1927 年 12 月にランカシャーのプレストンで上演された戯曲『フランケンシュタイン』（*Frankenstein*, 1927）をはじめ、その後に続く多くの作品が、原作の大幅な縮約、修正、削除などを経て、大衆にひと時の娯楽と気晴らしを与えるための劇として新たに生まれ変わっていくのである。この点については、アイルランドの作家、ブラム・ストーカー（Bram Stoker, 1847–1912）が 19 世紀末に世に問うた『ドラキュラ』（*Dracula*, 1897）に関しても例外ではない。『フランケンシュタイン』の数年前、すなわち 1924 年、ハミルトン・ディーンは 4 週間かけ、

自らの手で小説から舞台での再現が困難な場面や不要と思える様々なシーンを片っ端から取り除き、舞台用の脚本を書き上げている。その結果、『ドラキュラ』はホラーからメロドラマへと大きく様変わりし、不気味であるはずの伯爵は、怪物のような存在から魅力的な人物へと変身した。ダービィのグランド・シアター[1]、続いてロンドンでこの劇が上演されるや、観客は惜しみない拍手をもって歓迎し、興奮に酔いしれたのである。

そこで映画だが、こうしたホラーものはF. W. ムルナウ（Friedrich Wilhelm Murnau, 1888-1931）監督の作品に言及するまでもなく[2]、ドイツ映画界では中心的存在だったが、アメリカで最初の顕著なホラー映画が誕生するのは、フランスの作家ガストン・ルルー（Gaston Leroux, 1868–1927）の小説『オペラ座の怪人』（*Le Fantôme de L'Opéra*, 1919）を原作にした『オペラ座の怪人』（*The Phantom of the Opera*, 1925）まで待たねばならなかった。1924 年 10 月 29 日からユニバーサルスタジオで撮影が開始されたこの映画で、主役の怪人を演じるにあたり、秀逸なメーキャップと卓越した演技で観客を魅了する「千の顔を持つ男」と絶賛されていた俳優ロン・チェイニー（Lon Chaney, 1889–1930）は、醜悪な人相の、見るもおぞましい異形の男になりきるために、鼻の穴を広げるべくプラグを差込み、唇の端を押し上げるべく偽歯をはめ、頬を歪めるべく口中に円板を押し込んだ。当然のことながら、彼のこうした努力は報われる。メアリー・フィルビン（Mary Philbin, 1902–1993）演じるオペラ座の若手女優クリスティーヌが怪人の仮面を取ったシーンは、かつてカメラが捉えた中で最も人々の記憶に残るおぞましい瞬間だったからである。1925 年に公開されたこの映画の中で、チェイニーが不気味に変形したその顔をカメラに向けたとき、失神する女性が続出したという[3]。

しかし、この映画が成功したとはいえ、それが直ちにハリウッドをホラーものの製作に向かわせたというわけではない。状況が大きく動くの

は、トーキー映画が出現した 1927 年の『ジャズ・シンガー』（*Jazz Singer*, 1927）以降である。ルックスやスタイルが俳優としての存在感を左右する主要な決め手であったサイレント映画時代と異なり、声がそれらと同じように極めて重要な条件になると、それまで活躍していた多くの俳優たちのキャリアに突然終りがやってくる。映画脚本に自然な対話が要求され、それに合わせて俳優たちの自然な発声、演じる役に相応しい発音やイントネーションで英語を話すことが必要になってきたからである。そこでハリウッドは映画に変換できそうな、大衆に人気のある芝居を求めてブロードウエイに目を向け始める。そうした作品の一つに『ドラキュラ』があった。これはイギリスで上演されていたものをアメリカへ持ち込むにあたって、新聞記者上がりの脚本家、ジョン・L・ボールダーストン（John L. Balderston, 1889–1954）がアメリカ人好みに書き改め、ハンガリー出身のベラ・ルゴシ（Bela Lugosi, 1882–1956）が伯爵に扮して、ニューヨークのフルトン・シアターで 7ヶ月にわたって上演されていた劇だった[4]。ストーカーの小説の映画化権を獲得していたユニバーサルは、映画の様々な技術を確立し「映画の父」と呼ばれる D.W. グリフィス（David Wark Griffith, 1875–1948）のもとで経験を積んだトッド・ブラウニング（Tod Browning, 1880–1962）を監督に据え、ロン・チェイニーにドラキュラを演じさせようと考える。だが、肝心のチェイニーが 1930 年 8 月 26 日に咽頭ガンで急逝したことから、ブロードウエイで伯爵を演じていたルゴシにドラキュラ伯爵の役が回ってきたのである。8 週間という短期間で製作された『ドラキュラ』（*Dracula*, 1931）は、2 月 12 日、ニューヨークのロクシー・シアターで封切られた。アメリカで実績のないホラー映画の公開はユニバーサルにとって大きな賭けだったが、結果は満足のいく、会社側の不安を一気に吹飛ばす嬉しい驚きだった。公開からわずか 48 時間以内に 5 万枚ものチケットが完売するという盛況ぶりだったのである。そして、ルゴシが

Dracula

Dracula: Obey!

Mina: I love the night.

49 歳にして念願のハリウッドスターの仲間入りを果たしたことは云うまでもない。

『ドラキュラ』の成功に気を良くしたユニバーサル映画は、ホラーものが大衆受けするとみるや『フランケンシュタイン』（*Frankenstein*, 1931）の製作に着手する。『ドラキュラ』で大成功を収めたルゴシに怪物の役が打診されるが、分厚いメーキャップとセリフが無いことを理由に断ったため、イギリス人監督ジェームズ・ホエール（James Whale, 1889–1957）の推薦で、同じくイギリス出身の俳優ボリス・カーロフ（Boris Karloff, 1887–1969）にそのおいしい役が転がり込んでくる。彼はやせ細った面長で、ハンサムとは言い難い風貌だったことから、サイレント映画時代より脇役として悪人などを演じていた個性的な俳優だった。そのためか、怪物を演じるにあたっては衣服の下にたっぷりと詰め物をし、片方が 18 ポンドもの重量のブーツを履かねばならなかったが、彼ならではの迫力のある顔には分厚いメーキャップを施す必要などなかったのである。セリフはないが、彼の豊かな強面の表情は観る者を震え上がらせる恐怖と、人造人間の苦渋に満ちた哀感をたっぷりと表していた。カーロフもルゴシと同じ

く、この一作で誰もが知るハリウッドスターになったのである。しかしながら、こうした名声にはしばしば払わねばならない代償がつきまとうものだ。カーロフもルゴシも、彼らが演じた怪物のイメージから、やがて二人にもたらされる配役は怪物や悪党ばかりになってしまう。カーロフはそれらを喜んで受け入れたが、虚栄心からだろう、ルゴシはそのイメージを変えようと何年にもわたってもがき苦しんだ。彼を有名にしたのはドラキュラであり、彼がドラキュラを有名にしたのではないという事実を受け入れるまでに、彼は多くの失敗や挫折を繰り返さねばならなかったのである。

Frankenstein

Maria: Who are you? I'm Maria.

『ドラキュラ』と『フランケンシュタイン』の成功は、映画の世界にホラーという新たなるジャンルを誕生させた。『オペラ座の怪人』やトッド・ブラウニング監督、ロン・チェイニー主演の *London After Midnight*（1927）といった初期のサイレント映画は、薄気味悪いミステリーと見なされていたが、吸血鬼や人間が造り出した怪物は明らかにホラーものだった。『ドラキュラ』と『フランケンシュタイン』の両方を製作したユニバーサル映画は、それらが会社にもたらした利益と将来性を考えて、ホラーのジャンルを追求する決断を下す。また、その成功を目の当たりにしていた他の映

画製作会社パラマウント映画も、ルーベン・マムーリアン（Rouben Mamoulian, 1897–1987）を監督に迎え、フレデリック・マーチ（Frederic March, 1897–1975）を主演にして、ロバート・ルイス・スティーブンソン（Robert Louis Balfour Stevenson, 1850-1894）の小説『ジキル博士とハイド氏』（*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, 1886）原作の『ジキル博士とハイド氏』（*Dr. Jekyll and Mr. Hyd*e, 1931）でホラー市場に殴り込みをかけてきた。この小説はこれまでも映画化されたことがあり[5]、これ以降も幾度となくスクリーンに移し替えられるが、一人二役を迫力のある秀逸な演技で演じ、観客を酔わせたマーチを凌駕する俳優は誰一人として現われなかった。人間と怪物を快演した彼が、第 5 回アカデミー賞で最優秀男優賞を獲得したことは、ホラーのジャンルをさらに勢いづかせることとなる。

Dr. Jekyll and Mr. Hyde

Mr. Hyde: I want you, and what I want, I get.

MGM 映画の記念すべき最初のホラー作品は『怪物園』（*Freaks*, 1932）だが、不幸にしてユニバーサル映画やパラマウント映画のように成功することはなかった。アメリカのホラー作家トッド・ロビンズ（Tod Robbins, 1888–1949）が 1923 年 3 月に *Munsey's Magazine* に発表した短編小説 Spurs を原作に持つこの映画は、『ドラキュラ』で大成功を収めたばかりのトッ

ド・ブラウニングがメガフォンを握った作品だ。彼はロビンズの小説 *The Unholy Three*（1917）をベースにした 1925 年のサイレント映画『三人』（*The Unholy Three*）で成功を収めていたことから、社内ではこの作品の映画化に反対する声もあったが、重役たちは彼の要望を受け入れた。しかしながら、今回の『怪物園』に関しては、ブラウニングが製作すべきではなかった、後悔してもしきれないホラー映画となってしまったのである。本物の奇形者や障害者を出演させた旅回りの見世物小屋を背景に、小人のハンスと結婚する美しい娘、軽業師のクレオパトラが怪力男ヘラクレスと共謀し、莫大な財産を相続したハンスの殺害を企むという陰惨な物語である。ブラウニングは映画の中に本物のサーカスの怪物たちを出演させたが、不気味なメーキャップが施された彼らを目にした観客は、不快感と身の毛のよだつ恐怖しか感じなかった。架空ではない実物のホラーはしばしば人に嫌悪感を抱かせるものである。この作品は 1932 年 2 月 20 日、ロサンゼルスのフォックス・クリテリオンにおけるプレミアでの観客のネガティブな反応を受け、不適切と思える部分を削除して 90 分から 64 分の作品に改め、公開した。だが、観客ならびに批評家の受けは極めて悪く、164,000 ドルの赤字を計上する。それだけではない。『怪物園』はその不快さから、イギリスでは 30 年以上にわたって公開禁止処分となってしまったのである。

数年後、MGM は再びホラーの分野に挑戦する。今回もトッド・ブラウニングを監督に、ファンタジー作家エイブラハム・メリット（Abraham Grace Merritt, 1884 –1943）の小説 *Burn Witch Burn*（1932）を原作にした『悪魔の人形』（*The Devil Doll*, 1936）だ。無実の罪で 17 年にわたって投獄されていた男が、人を人形のサイズに縮小する技術を研究していた囚人の科学者と共に脱獄し、一寸法師を使って、かつて自分を陥れた男たちに復讐するという物語である。敵を討つ男ラヴォンドを、『自由の魂』（*A Free Soul*, 1931）でアカデミー男優賞に輝いているサイレント映画時代からの

名優、ライオネル・バリモア（Lionel Barrymore, 1878–1954）が演じるこの作品は、物語もさることながら優れた特殊効果のおかげで大いに受けた。

The Devil Doll

Lavond: Don't be too alarmed, Radin.

ワーナー・ブラザーズがホラーのジャンルに持ち込んだ最初の映画は、ブロードウエイで 1931 年 2 月から同年の 4 月まで 80 回にわたって公演が行われた劇 *The Terror*（1931）原作の *Dr. X*（1932）だった。後年、名作『カサブランカ』（*Casablanca*, 1942）で誰もが知るところとなるマイケル・カーチス（Michael Curtiz, 1886–1964）がメガフォンを握り、リー・トレイシー（Lee Tracy, 1899–1968）、フェイ・レイ（Fay Wray, 1907–2004）、それにライオネル・アトウィル（Lionel Atwill, 1885–1946）が主演したこの作品は、カニバリズムを研究する片腕の医師が、人工腕を装着して殺人を犯すというもので、物語の面白さというよりは、2 色カラーで撮影されたことで世間の注目を集めた。この成功により、翌年には再度カーチス、アトウィル、レイのチームで『肉の蝋人形』（*Mystery of the Wax Museum*, 1933）が製作される。アトウィルは蝋人形館を開いた彫刻家イワン・イゴールを、グレンダ・ファレル（Glenda Farrell, 1904–1971）は、イゴールが霊安室から遺体を盗み出し、生命感のある蝋人形を作るために、その遺体を蝋漬け

Dr. X

Stevens: You’re an astronomer, Doctor?

Dr. Rowitz: Not that, sir.

にしている事実を発見する新聞記者フローレンス・デンプシーを好演した。物語のクライマックスは、イゴールの顔もまたおぞましいほどに醜い己の顔を隠すために、蝋の仮面をかぶっていたことが顕わになったときだった。

この間、ホラーのパイオニアたるユニバーサル映画は密かに新たなる怪物の創造に従事していた。1932 年に公開されたカール・フロイント（Karl Freund 1890–1969）監督、カーロフ主演の『ミイラ再生』（*Mummy*）である。考古学者たちの軽率な行為から現代に蘇える、生きながら壁に閉じ込められた古代エジプトの高僧イムホテプの物語は、脚本を担当したジョン・L・ボルダーストンが記者だった時代に *New York World*（1810–1931）紙に掲載した、当時、世界的話題を呼んだツタンカーメンの発見を題材にしたものだった。

Mummy

Helen: The real Egypt.

Ardath Bey: I am Ardath Bey.

この同じ年に、カーロフはイギリスの小説家 J. B. プリーストリー（J. B. Priestley, 1894–1984）の小説 *Benighted*（1927）を原作に、ジェームズ・ホエール監督のもとで製作されたホラー・パロディー *The Old Dark House*（1932）で、口がきけないアルコール依存症の執事として出演している。ユニバーサル映画のもう一人の怪奇スター、ルゴシはポー（Edgar Allan Poe, 1809–1849）の名作短編小説「モルグ街の殺人」（The Murders in the Rue Morgue, 1841）からヒントを得た『モルグ街の殺人』（*Murders in the Rue Morgue*, 1932）で、女性たちを誘拐し、彼女たちに檻に入ったゴリラから採取した血液を注射する狂人を演じ、直後に『恐怖城ホワイト・ゾンビ』（*White Zombie*, 1932）に出演した。ハイチに関するウイリアム・シーブルック（William Seabrook, 1884–1945）の有名なノンフィクション *The Magic Island*（1929）をベースにした、ヴィクター・ハルペリン（Victor Hugo Halperin, 1895–1983）監督のこの映画で、ルゴシは生きる屍たるゾンビを奴隷労働者として自由に操る呪術者に扮している。さらに彼は、チャールズ・ロートン（Charles Laughton, 1899–1962）が獣類を実験材料にする狂気のモロー博士を演じる『獣人島』（*Island of Lost Souls*, 1932）に

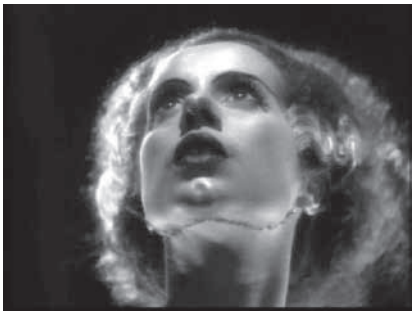
顔を覗かせた。アール・C・ケントン（Erle C. Kenton, 1896–1980）監督のこの作品は、イギリスの作家 H. G. ウエルズ（H. G. Wells, 1866–1946）の SF 小説『モロー博士の島』（*The Island of Doctor Moreau*, 1896）を原作に、スーパーマンというキャラクター誕生のきっかけとなった作品として有名な『闘士』（*Gladiator*, 1930）の作者で知られる、脚本を担当したアメリカの SF 作家フィリップ・ワイリー（Philip Wylie, 1902–1971）と、ウォルデマー・ヤング（Waldermer Young, 1878–1938）が自由に手を加えたものだった。そのため、原作とはかけ離れたものとなり、あからさまな性の暗示、動物に対する残虐性、目を覆いたくなるような陰惨な恐怖などの描写からイギリスでは上映禁止となってしまった。なお、H. G. ウエルズの小説はジェームズ・ホエール監督の『透明人間』（*The Invisible Man*, 1933）で再びスクリーンに戻ってくる。ただし、クレジットにはウエルズが 1897 年に出版した同名の SF 小説が原作となってはいるが、脚本を手がけた 3 人の脚本家のうちの一人フィリップ・ワイリーが 1931 年に出版した *The Murderer Invisible* から多くを借用していることから、ウエルズ原作というよりはワイリーの作品といった方が正しいだろう。

1934 年、美術監督から昇進し、初めてメガフォンを握ったエドガー・G・ウルマー（Edgar G. Ulmer, 1904–1972）の『黒猫』（*The Black Cat*, 1934）は、ポーの短編小説に触発された作品とされているが、実際には、彼の短編小説「黒猫」（The Black Cat, 1843）の名を借りて、脚本も担当したウルマーが作家のピーター・ルーリック（Peter Ruric, 1902–1966）、ならびにトム・キルパトリック（Tom Kilpatrick, 1898–1962）と共に書き下ろしたもので、原作の面影は跡形もない。とはいえ、ホラー俳優として最も有名な二人、カーロフとルゴシが共演した最初の作品で、善と悪がとぐろを巻く複雑な物語の中で繰り広げられる彼らの力強い演技は感動的である。なお、カーロフは 1935 年の『フランケンシュタインの花嫁』（*The*

Bride of Frankenstein）で、彼の最も有名な役割に戻った。燃え落ちる風車小屋の中で焼死したと思われていた怪物が実は生きており、墓荒らしにやって来た科学者により、フランケンシュタイン博士の協力を得て、怪物のために花嫁を誕生させるという話である。ジェームズ・ホエールが監督のこの映画で、怪物の花嫁を演じたイギリス人女優エルサ・ランチェスター（Elsa Lanchester, 1902–1986）は冒頭の場面で、ギャヴィン・ゴードン（Gavin Gordon, 1901–1983）扮するイギリスのロマン主義を代表する詩人ロード・バイロン（Lord Byron, 1788–1824）と、自作の小説で描いたフランケンシュタインや怪物について語り合うメアリー・シェリーの役も演じた。

The Bride of Frankenstein

Frankenstein's Monster: Friend?



She screams, looking at him.

1935 年、狼男が『倫敦の人狼』（*Werewolf of London*）においてハリウッドデビューを果たす。この作品で主役を演じるのは、かつて私がインタビューしたことのある 20 世紀アメリカ文学を代表する作家の一人、アースキン・コールドウエル（Erskine Caldwell, 1903–1987）[6] の代表作『タバコ・ロード』（*Tobacco Road*, 1932）を原作にしたブロードウエイ劇 *Tobacco Road*（1933–1941）で、主人公ジーター・レスターを演じて絶賛されたヘ

Werewolf of London

Lisa: It's Lisa. Don't you know me?

ンリー・ハル（Henry Watterson Hull, 1890–1977）、それにワーナー・オーランド（Warner Oland, 1879–1938）である。「狼憑き」に効くという世にも不思議な効能を持つ奇草「狼草」を求めてチベットの高原に出かけたハル扮するイギリスの著名な植物学者グレンドン博士は、月光を浴び怪しく光るその奇草を見つけ、一株を採取しようとしたまさにそのとき、どこからともなく現れた一匹の狼により右腕を噛みつかれる。ロンドンに戻った彼は、それからしばらくして満月の夜になる度に、自らの意思とは関係なく凶暴な性質へと変わり、人の血を求めて暗闇を彷徨ようになってしまった。また、ちょうどこの時期、カール・フロイント監督、ピーター・ローレ（Peter Lorre, 1904–1964）主演の『狂恋・魔人ゴーゴル博士』（*Mad Love*, 1935）で、それまでスクリーンを飾った中で最も狂気に侵された、世にも恐ろしい外科医が登場した。ピアニストの妻に横恋慕しているピーター・ローレは、ピアニストが交通事故に巻き込まれ片手を失ったとき、彼に対する激しい嫉妬とその妻に対する絶望的な恋心から、彼を地獄に突き落とそうと企んで、彼の腕に殺人鬼の手を接合するという醜い恐怖の物語である。

Mad Love

Dr. Gogol: Each man kills the thing he loves.

ユニバーサル映画はルゴシとカーロフを今度は、ポーの詩「大鴉」（Raven, 1845）からタイトルを頂戴した映画、『大鴉』（*The Raven*, 1935）で共演させる。ルイ・フリードランダー（Louis Friedlander, 1901–1962）監督のこの作品で、ルゴシは週末の晩餐に招いた客を、カーロフ扮する醜悪な顔の脱獄殺人鬼を利用し、彼を意のままに操って、ポーの別の作品「落とし穴と振り子」（The Pit and the Pendulum, 1842）という短編小説の中で描かれている拷問器にかける医師を演じた。この翌年の 1936 年に、二人はまた *The Invisible Ray*（1936）で顔を合わせる。ランバート・ヒルヤー（Lambert Hillyer, 1893–1969）監督のこの作品では、アフリカの調査旅行で発見した隕石から出る放射能を浴び、狂気に追いやられたカーロフ演じる科学者を助けようとする忠実な友人役を演じてみせた。

ホラー映画は 1936 年になると次第にその勢いを失い始める。イギリスでの検閲により、多くのハリウッド発のホラー映画がイギリス国内で公開禁止になってしまったからだ。海外における主要なマーケットが縮小したのである。そうしたことも影響し、ユニバーサル映画から送り出された『女ドラキュラ』（*Dracula's Daughter*, 1936）が、悲しいかな、第一期ホラー

ブームの最後を飾る大作となってしまった。物語がドラキュラの死の数ヶ月後から始まる、ランバート・ヒルヤーがメガフォンを握ったこの作品で、吸血鬼の娘を演じたグロリア・ホールデン（Gloria Holden, 1903–1991）は、吸血鬼の呪われた性から逃れようとするも、先祖から否応なしに受け継がれてきた人の血を渇望するＤＮＡはそれを許さなかった。不況に陥ったユニバーサル映画は起死回生の手段として、一か八かの勝負に出る。かつて人気のあった作品を、装い新たにして送り出すことにしたのである。彼らはホラーブームの復活をカーロフ、ルゴシ、アトウィルに賭け、『フランケンシュタインの復活』（*Sons of Frankenstein*, 1939）、ジョー・メイ（Joe May, 1880–1954）監督の *The Invisible Man Returns*（1940）といった作品に戻っていく。同じ年、名プロデューサー、ベン・ピヴァー（Ben Pivar, 1901–1963）により、*The Mummy's Hand*（1940）でミイラもエジプトの墓場から蘇ったのである。

ユニバーサル映画のホラーブーム第二期の最高作は、名優ロン・チェイニーの息子、ロン・チェイニー・ジュニア（Lon Chaney, Jr., 1906–1973）を主役に据えた、ジョージ・ワグナー（George Waggner, 1894–1984）監督の『狼男』（*The Wolfman*, 1941）だ。物語は、一人の青年が狼に噛まれたせいで夜になると狼に変身し、闇の世界に飛び出しては人を殺すというものである。そして最後は、若い女性を襲ったところを自分の父親に銀の柄の付いた杖で殴り殺されるのだ。ロマンティックな要素を入れたこの映画は成功し、幾つかの続編を生み出した。なお、狼男に関する詳細な描写の伝説が少ないことから、脚本を担当した作家のカート・シオドマク（Curt Siodmak, 1902–2000）は、自由に想像力を働かせ、狼男が銀を嫌うといったことから満月の夜になると人間から狼に変身するといった点に至るまで、狼男に関するさまざまな話を創作した。こうしたことは、この後に続く多くの類似作品で繰り返され、次第に実際の神話として受け入れられる

The Wolfman

Voice: Bad luck.

Larry: I killed Bela. I killed Richardson.

ようになる。すなわち、不思議な運命のいたずらにより、狼男に関する現代の民間伝承はハリウッドの脚本家の手によって作り上げられたのだった。ついでながら、カーロフは、この年、コロンビア映画に出演した。ウイリアム・スローン（William Sloane, 1906–1974）の SF 小説 *The Edge of Running Water*（1939）を原作にした、ドミトリク（Edward Dmytryk, 1908–1999）監督の *The Devil Commands*（1941）である。この作品は標題に「悪魔」の文字があるものの、悪魔とは何の関係もなく、交通事故で亡くした妻と脳波で交信するという研究に取り付かれた、カーロフ扮する科学者の破滅を描いたものだった。

ユニバーサル映画に話題を戻す。同社はより少ない予算で、よりワイルドな続編作りを着実に続けていた。こうした作品の中にアール・C・ケントン監督の『フランケンシュタインの幽霊』（*Ghost of Frankenstein*, 1942）、ハロルド・ヤング（Harold Young, 1897–1972）監督の『ミイラの墓場』（*The Mummy's Tomb*, 1942）、ロイ・ネイル（Roy William Neill, 1887–1946）監督の『フランケンシュタインと狼男』（*Frankenstein Meets the Wolfman*, 1943）、ロバート・シオドマク監督の『夜の悪魔』（*Son of Dracula*, 1943）

などがある。さらにホラーのジャンルに、フォード・ビーブ（Ford Beebe, 1888–1987）監督の *Night Monster*（1942）、ドミトリク監督の *Captive Wild Woman*（1943）、ジェームズ・ホーガン（James P. Hogan, 1890–1943）監督の *The Mad Ghoul*（1943）が新たに仲間入りした。

他の映画会社もホラーが安い費用で製作できることから、戦時中にこの市場へと乗り込んでくる。最も注目に値する映画会社が RKO である。同社ではプロデューサー、ヴァル・ルートン（Val Lewton, 1904–1951）が、1942 年から 1945 年までに『キャット・ピープル』（*Cat People*, 1942）、『私はゾンビと歩いた』（*I Walked With a Zombie*, 1943）、*The Ghost Ship*（1943）、*The Leopard Man*（1943）、*The Seventh Victim*（1943）、『キャット・ピープル』の続編である『キャット・ピープルの呪い』（*The Curse of the Cat People*, 1944）、『死体を売る男』（*The Body Snatcher*, 1945）、*Isle of the Dead*（1945）といったホラー映画を矢継ぎ早に世に送り出す。なかでも彼の最高傑作は『キャット・ピープル』と『私はゾンビと歩いた』である。両作品ともジャック・ターナー（Jacqes Tourneur, 1904-1977）が監督したものだが、ホラーを直接見せるのではなく、暗示するという手法をとっている。このことはルートンの映画について全体的に言えることであり、超自然の不気味さは暗示にとどまり、怪物はしばしば肉体ではなく、われわれの心の産物なのである。

1944 年頃になると再びホラー映画の人気は下降線を辿り始める。そのためユニバーサル映画は、アール・C・ケントン 監督の『フランケンシュタインの館』（*House of Frankenstein*, 1944）において、これまで人気があったドラキュラ、狼男、フランケンシュタインの怪物、狂気の科学者、背むし男といった怪物たち全てをまとめて出演させた。一年後、ケントンはメガフォンを握った『ドラキュラとせむし女』（*House of Dracula*, 1945）で、再びこの怪物 3 人衆、ドラキュラ、狼男、フランケンシュタインの怪物を

招集している。

1945年、第二次世界大戦（1938–1945）が終結してから最初のホラー映画がイギリスで公開された。この国では、これまで市民の道徳を害する恐れがあるとしてホラー映画の公開には消極的だったが、アルベルト・カヴァルカンティ（Alberto Cavalcanti, 1897–1982）、チャールズ・クライトン（Charles Crichton, 1910–1999）、ベイジル・ディアデン（Basil Dearden, 1911–1971）、ロバート・ハメール（Robert Hamer, 1911–1963）監督による5つのオムニバスもの『夢の中の恐怖』（*Dead of Night*, 1945）は、ホラーに対する大衆の持つ印象に変化を生じさせた。とはいえ、ホラー映画の人気を回復させる起爆剤とまでには至らなかった。やがて、人々の嗜好の変化と共に衰退の一途を辿り続けるホラー映画は、チャールズ・バートン（Charles Barton, 1902–1981）監督による1948年製作の映画『凸凹フランケンシュタインの巻き』（*Abbott and Costello Meet Frankenstein*）をもって、その第二次ブームの終わりを告げる。お笑いコンビ、アボット（Bud Abbott, 1895–1974）とコステロ（Lou Costello, 1906–1959）演じるドタバタ劇のなかで、ユニバーサル映画がそれまで世に送り出し、大衆を大いに楽しませてきたフランケンシュタインの怪物、ドラキュラ、狼男、狂気の科学者、そしてミイラや透明人間などを含めた怪物たちは、いつしかコメディアンたちの抱腹絶倒の笑いに飲み込まれ、次第に姿を消していくのであった。

注

1　1924年6月に開幕し、大成功を収めた。

2　*Der Janus-Kopf*（1920）、*Nosferatu*（1922）など。

3　1925年9月6日、ニューヨークのアスター・シアター、翌月の10月17日、ハリウッドでの上映の後、11月15日から一般公開が開始された。

4　1927 年 10 月 5 日から 1928 年 5 月 19 日まで、合計 261 回にわたり上演された。

5　サイレント映画時代の 1920 年にジョン・S・ロバートソン（John S. Robertson,1878–1964）監督の『狂える悪魔』（*Dr. Jekyll and Mr. Hyde*）、F. W. ムルナウ監督の『ジキル博士とハイド氏』（*Der Janus-Kopf*）、J. チャールズ・ヘイドン（J. Charles Haydon, 1875–1943）監督の『ジキル博士とハイド氏』（*Dr. Jekyll and Mr. Hyde*）の順で、立て続けに公開された。

6　「アースキン・コールドウエルにインタビュー 名作『神の小さな土地』に描かれた世界」*The Student Times*, March 10, 1972。ちなみに、ブロードウエイ劇『タバコ・ロード』は 1933 年 12 月 4 日から 1941 年 5 月 31 日まで合計 3,182 回にわたって上演され、当時のロングラン記録を塗り替えた。